室城秀之校注『うつほ物語　全』

佐藤信一

ついに出た。待望久しい『うつほ物語』の新しい注釈、室城秀之先生の『うつほ物語　全』が刊行を見た。

考えようによっては、この『うつほ物語』と言う作品は不幸な作品である。今日入手し得る、しかも全部揃ったテキストは皆無に等しい。またその置かれた本文の状況にしても、最善本とされる前田尊経閣文庫本を根幹に置くのが通説である。だが、それでも意の通じない箇所が多すぎる。本文の重複・錯簡も散見される。つまり、注釈の基盤である本文の決定から開始せねばならないのである。室城先生のことばによれば、「『うつほ物語』は、物語文学史上貴重な作品なのだが、その伝本には、重複や欠文をはじめ、どのような本文上の処理を行なっても処理できない矛盾が多く存在し、研究をさまたげてきた」（「解説」九四六頁）のである。そこから合理的な本文を作る近世の研究動向を否定し、近代の研究は矛盾をそのまま認める成立論の方向へと流れてきた。だが室城先生はその方向とは一線を画する。「『うつほ物語』の研究は、あたりまえのことだが、物語の本文そのものの解釈の追求から出発しなければならない。解釈が困難な箇所があっても、それを合理的に説明するために、安易に成立過程上の問題へと逃げ込んではならない」（「解説」九四七頁）という「あたりまえ」のことがないがしろにされてきたことへの警鐘と受け取れよう。

その「本文そのものの解釈」の基礎となっていると思われるのが、先生による語彙・語法の研究である。従来よく見受けられた『源氏物語』などの女流仮名文学作品の語彙のみならず、漢籍の訓点語に対する研究の成果を取り込んだ新しい読みが示されている箇所が多く見られる。つまり『うつほ物語』を読み解くことで、「平安時代前期から院政期、さらには鎌倉時代へと、地下の水脈のように続いてゆくことばの歴史が確かめられる」（「解説」九五〇頁）のである。現状では『源氏物語』こそが平安時代の文学研究の中心であるが、そのような状況に対して一石を投じた注釈書であると言えよう。

その注釈書としての体裁は各頁毎に校異・注釈を示し、前田家本を底本にした校訂本文を提示している。

巻末に先生と齋藤正志氏との作成による略系図と、芳賀繁子氏との作成にかかる「うつほ主要テキストページ対照表」とを付す。

この『うつほ物語　全』は何よりも読みやすい。この注釈を通して、『うつほ物語』がより開かれた作品になるであろうことを喜びとしたい。

（平成七年一〇月一五日刊　A5版　九六五ページ　おうふう）